

高校生の未来に種をまく

SDGs×つくば市

持続可能な開発目標(SDGs)に関わる教育を実践している先生を紹介する連載。今回は、研究学園都市として多くの大学や研究機関などがあるつくば市(茨城県)ならではの環境を生かし、地域と世界をより多様にとらえる学習を行っている茨城県立竹園高校を取材しました。

3・4時間目

つくば市とSDGs① 自然・歴史・文化から

3時間目では筑波地域の自然や歴史、文化を講義。4時間目は筑波山地域ジオパーク推進協議会の高田正澄さんが、地学的に価値のある筑波地域の地形と地質、さらにそれが育んできた豊かな生態系や文化、歴史を紹介。それらを生かし続けるためには、SDGsに17の目標があるように環境問題、生活の安全性、産業発展など多様な観点が必要だと語った。



上：筑波地域の豊かさを伝えたいと、地球温暖化の影響やSDGsについて考える講義となった。左：講義で使ったスライド。



5・6時間目

つくば市とSDGs② 行政から

つくば市とのクロスカリキュラム授業のテーマは「SDGs未来都市つくば」のまちづくり。つくば市役所政策イノベーション部企画経営課の山本聖也さんらを招き、「10年後、つくば市で当たり前になってほしいこと」「そのために今、自分にできること」を考えるワークショップを実施した。生徒からは、「大人も予防接種を徹底すれば健康の目標に近づく」「シャッター通りになっている商店街を、自分たちの世代が活性化し住み続けられる街にしたい」などの意見が出された。「この短時間にいろいろな意見が出て素晴らしい」と山本さん。



つくば市やNPO、JICAだけでなく、筑波大学や企業などとも連携して、これからはSDGs学習を深めていきます。

奈良由紀子(ならゆきこ)さん
茨城県立竹園高校
企画開発研究部長・教諭



上：生徒たちから意見を聞く山本さん(右端)。左：自分たちの実感からつくば市の未来像を考え、話し合った。授業の最後に話し合いの内容を発表し、みんなでシェアする。



1・2時間目

SDGsって何？ あらゆる国が目指す目標

ロールプレイで異文化の人々との共生を体感。さらに合意形成やコミュニケーション能力を養う方法を学んだ。JICAの出前講座ではJICA筑波センターの柳詰ゆう紀さんがSDGsの概要を講義。その後、タンザニアと日本のSDGs達成状況を比べ、SDGsは途上国だけの問題ではないことを学んだ。



上：本日の先生はJICAの柳詰さん。左：タンザニアの課題ってなんだろう？という奈良さんの問いには、正解が用意されていない。下：グループになり、タンザニアと日本のSDGsの達成状況を考える生徒たち。



地域と連携した 多様な授業

こうして第1学年全員を対象にし、地域と連携した「探Q基礎」の学習が始まった。1・2時間目は異文化理解と多文化共生、さらにSDGsと世界の現状について、続く3・4時間目は、つくば市の自然や文化と、地球温暖化がもたらす影響について、そして最後の5・6時間目はSDGsの

ルを念頭に進められていることを知りました。そういう海外の具体的な例を学ぶと同時に、日本や自分たちが暮らす地域について知ることが必要です。そこで地域と連携して、つくばの歴史や文化、自然、社会をSDGsの視点でとらえる授業を実施したいと思いました。

つくば市の行政や諸団体など学外に声をかけるとともに、同僚国際の木村功さんとともに授業の態勢や内容を固めていった。授業を担当する教諭たちで「探Q基礎班」を組み、誰でも同じレベルの授業ができるよう、教材研究・学習指導案作成などの準備を重ねた。「生徒だけでなく、私たち教員もSDGsについてはまだまだ理解していないことも多いので、一緒に学ぶつもりで取り組んでいます」と奈良さんは言う。

こうして第1学年全員を対象にし、地域と連携した「探Q基礎」の学習が始まった。1・2時間目は異文化理解と多文化共生、さらにSDGsと世界の現状について、続く3・4時間目は、つくば市の自然や文化と、地球温暖化がもたらす影響について、そして最後の5・6時間目はSDGsの

グローバルな人材を 育成するために

県内で唯一国際科がある竹園高校は、国際社会に対する生徒の関心が高く、大学や研究機関、企業が多い研究学園都市ならではの環境を生かしたカリキュラムを実践してきた。なかでも第1学年の総合的な学習の時間を「探Q基礎」と名づけ、世界にあるさまざまな問題への関心を高めるために、地域と連携して国際理解教育を実施。課題を発見して解決する力を養っている。

2018年は、同校教諭で企画開発研究部長を務める奈良由紀子さんが中心となり、「SDGsに対する理解を深めよう」というテーマで授業を行ってきた。「国際科のある高校として、グローバル人材の育成は教育の柱です。世界のさまざまな問題を持続可能性という視点で見つめ直すことが、今、必要ではないでしょうか。そこで、生徒全員がSDGsのゴールに向けて行動するきっかけをつかむ、そんな授業を行いたいと思いました」と奈良さんは言う。

同年夏、以前から関心を持っていたJICA教師海外研修に参加したことも刺激になった。「研修先のタンザニアでは、多様な分野の国際協力事業がSDGsの

視点から見つたつくば市の政策とつくば市が目指すゴールについて、講義やワークショップで学んだ。

6時間目を担当したつくば市の担当者は、こうした授業に期待を寄せている。「つくば市は18年に『SDGs未来都市』に選定され、市をあげてSDGsに先進的に取り組んでいます。それを高校生が知り、地元であるつくば市を誇りに思ってもらいたい。そして、SDGsのゴールを達成することがどう持続可能な社会につながる、自分たちの行動がどんな影響を与えることができるのかに目を向けるきっかけにしてほしいと思います」。

学習の成果は2月の「探Q発表会」で発表されるが、学びはそれで終わりではないと奈良さんは言う。「国際科では課題研究として引き続き学びますし、2年生で行く沖縄スタディツアーでも、SDGsを絡めて学びを深めたいと考えています。持続可能な社会を考える視点は、生徒たちが社会に出たときにも必要になるもの。今はその種をまいていてと考えていますし、本校の特色ある教育プランのひとつにしていきたいです」。

こうした授業が当たり前になることで、持続可能な社会の実現が一步近づきます。